

2012年3月14日

申請者 田中 一嘉  
論文題目 中世ドイツ文学盛期における「ミンネの教訓詩」  
- ミンネ概念の形成とその指南 -

論文審査委員 古澤 ゆう子  
清水 朗  
武村 知子

## 1. 本論文の内容と構成

「愛・恋愛・性愛」を意味する中高ドイツ語「ミンネ (*minne*)」は、実用語としては現代独語に継承されていないが、中世を通じて様々な文学ジャンルの作品に多様な形で登場し、中世ドイツ文学の中心的主題と言える。12世紀末から13世紀中葉にかけて最盛期を迎えたドイツ宮廷文学は、中世ラテン文学と並んで約1世紀進んだフランス宮廷文学の影響を多大に受けていた。この時代に謡われたミンネ概念には、いわゆる「宮廷風恋愛 (*amour courtois*)」との密接な関連性が窺えるが、中世ドイツの詩人たちは、形式・主題の両面でそれまで培われてきた文学的伝統を基礎として、ドイツ語圏独自のミンネ観を彼らの詩作に織り込んでいった。その際、「高きミンネ (*høhe minne*)」や「低きミンネ (*nideriu minne*)」といったミンネの分類がおこなわれた。これは、詩人たちが「ミンネとは何か」を問い続けた末に至ったひとつの帰結であると同時に、次の世代の詩人たちが「ミンネとは何か」を新たに問うための豊かな土壌ともなっている。この問いと答えの連関の中で、中世盛期の詩人たちはミンネ概念を問い、それに答えるためのひとつの定まった形式と内容を準備したのではないか、そして「ミンネとは何か」を問い続けた詩人たちの試行錯誤の結果として「ミンネの教訓詩 (*Minnelehre*[-*gedichte*])」と名付け得る文学ジャンルが中世盛期に成立していたであろうという仮説から、本論文は出発し、ミンネの教訓詩という文学ジャンルが中世盛期の文学的伝統と(受容者の)需要との関連性においてどのように形成されていったかを、共時的かつ通時的連関に配慮しつつ考察している。

論文構成は以下のとおりである。

### 序

1. 「ミンネ (*minne*)」という語について
2. 「ミンネとは何か」——文学史的問題設定
3. 中世文学史におけるジャンルの問題  
——文学ジャンル「ミンネの教訓詩」の可能性
4. 愛の理論書・愛の指南書

## 第1部 文学ジャンルとしての「ミンネの教訓詩」

### 第1章 アンドレアス・カペルラヌス：‘De amore’

- 第1節 作者と作品の成立および伝承について
- 第2節 ‘De amore’におけるアモールの論理的分析・記述
- 第3節 討論形式とアレゴリー
- 第4節 アモールの定式化
- 第5節 小冊子‘De amore’から「ミンネの教訓詩」へ

### 第2章 ドイツ中世盛期における教示的詩作群

#### 第1節 「ミンネの教訓詩」の定義に向けて

- 1. 通時的連関と共時的連関
- 2. 「文学ジャンルの四様態」
- 3. 本章で扱う作品について

#### 第2節 『秘密の使者』

- 1. テキスト・成立年代
- 2. 前後半部分の内容的差異 —— 〈使者—私—受容者〉の視座から
- 3. 「恋文」か「助言書」か
- 4. 宗教的「教訓詩」の可能性

#### 第3節 ハルトマン・フォン・アウエ：『哀歌』

- 1. 作品の構成と基本コンセプト —— *complainte* と *salut*
- 2. 「討論（詩）」における役割分担
- 3. 奉仕のすすめ —— 『哀歌』におけるミンネの心理学
- 4. 「小冊子」としての再定義

#### 第4節 トマジン・フォン・ツィルクレーレ：『異邦人』

- 1. 作者とその背景
- 2. 一般教書
- 3. 『異邦人』におけるミンネの取り扱い
- 4. テキストと受容

#### 第5節 「ヴィンスベッケン詩」

- 1. 「ヴィンスベッケ」
- 2. 「ヴィンスベッキン」
- 3. 「教訓詩」としての特徴

#### 第6節 デア・シュトリッカー：『婦人の名誉』

- 1. 詩人とテキスト
- 2. 作品の成立年代の文学史的考察
- 3. 作品の主題
- 4. *mære*の複合体としての「小冊子」

#### 第7節 ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタイン：『婦人の書』

- 1. 『婦人奉仕』と『婦人の書』

2. ウルリヒ研究＝（史的）詩人研究
3. 『婦人の書』における討論（批判）
4. 批判と教訓

#### 第8節 中世盛期における三つのミンネの教訓詩

1. ミンネに対する親近性
2. 「小冊子」形式
3. 伝承と伝統

## 第2部 「ミンネの教訓詩」の構造

### 第1章 ミンネにおける奉仕の理念

#### ——ミンネの〈理論書〉としての「ミンネの教訓詩」(1)

#### 第1節 奉仕へと至らしめるミンネ

1. ミンネの教訓詩における通時性と共時性
2. 「喜びと苦悩」
3. 皇帝のトポス
4. ミンネ観の諸相

#### 第2節 奉仕の理念

1. 「騎士」
2. 「労苦」——美德のカタログ
3. 「分別」
4. 「この世の喜び」——共同体秩序の原理

### 第2章 ミンネにおける女性の理想化

#### ——ミンネの〈理論書〉としての「ミンネの教訓詩」(2)

#### 第1節 「ご婦人」の理念

1. 地上の天使としての「ご婦人」
2. 「ご婦人」の美
3. 「名誉の導き手」としての「ご婦人」
4. 「ご婦人」
5. 「喜び」をもたらす存在としての「ご婦人」

#### 第2節 ミンネと官能性 ——ミンネのパラドクス

1. 「魅惑的な場所 (locus amoenus)」
2. 性的放埒
3. 「娯楽」という快楽
4. ミンネの賞味期限

#### 第3節 ミンネと結婚

1. (女)性の忌避
2. 中世盛期文学における結婚の描写
3. 『婦人の書』における女性の五様態
4. ミンネの「場」としての結婚

### 第3章 「ミンネの教訓詩」における理想と現実、伝統と革新

#### 第1節 作品と受容者の関係

1. 受容者の射程
2. 批判者との対決
3. 「世間」
4. 宮廷の「紳士淑女」

#### 第2節 〈批判の書〉としてのミンネの教訓詩

1. 問題の所在を確認する機能
2. 過去との対比
3. 世相批判

#### 第3節 〈指南書〉としてのミンネの教訓詩

1. 助言
2. ミンネの実効性
3. 実用書としてのミンネの教訓詩

#### 第4節 理想の現実化

1. ミンネの教訓詩の機能 ——理想郷の呈示
2. この世における救済
3. パラダイス
4. 理想の結婚
3. 理想（虚構）と現実

#### 結論

1. ミンネの教訓詩の形式的特徴と内的構造
2. 「ミンネの教訓詩」の文学史上の位置付け
3. ミンネと女性 ——ミンネの教訓詩の教示的影響力

#### 略記一覧

#### 文献リスト

序において、「ミンネ」の語と概念の背景が概観され、ミンネを論ずる書に関する文学史的問題が考察され、愛の理論書であり指南書である「ミンネの教訓詩」という文学ジャンルが成立した可能性が示唆される。

第1部第1章ではまず、ミンネの教訓詩の同時代的な構造的モデルとして、アンドレアス・カペルラヌスの‘*De amore*’が着目される。‘*De amore*’の「小冊子 (*libellus; tractatus*)」という形式的特徴は、討論形式、アレゴリー、本歌取りなど様々な叙述パターンが組み合わさったものであり、アモールを論理的に説明し、それを教えとして効果的に受容者に伝達するという機能を有する。この形式的特徴に鑑みて、第2章ではドイツ語圏中世諸作品の再考察がおこなわれる。ここでミンネの教訓詩に属する作品として考察の対象となる諸作品は、従来の文学史的記述において、（中世後期に成立したとされる）「ミンネの弁論

詩 (Minnerede) 」という文学ジャンルにとっての「先駆的作品群」として補足的に扱われてきたか、あるいは単に中世盛期における「教示的作品群」として文学史の中で傍らへ置かれていた作品である。これらの諸作品を個別的に、作品の韻律構造、叙述形式、内容的統一性などの観点から分析したのち、ハルトマン・フォン・アウエの『哀歌 (Klage) 』 (1180年頃)、デア・シュトリッカーの『婦人の名誉 (Frauenehre) 』 (1230年頃)、ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタインの『婦人の書 (Frauenbuch) 』 (1257年頃) の三つがミンネの教訓詩の主要テキストとして挙げられる。この三作品は共に、ミンネを論理的に説明する意図と、それを教示的に受容者に教えるという意図によって内容的な一貫性を伴って詩作されている。ミンネの教訓詩の形式的特徴としての「小冊子 (büchelîn) 」という形式の内には、例えば『哀歌』のような内省的な「肉体」と「心」のアレゴリー的な討論形式および『婦人の書』における男女の討論、そして、とりわけ『哀歌』と『婦人の名誉』に特徴的なアレゴリー表現といった叙述形式が織り交ぜられている。このような修辭的技法はミンネという抽象的な現象を具体的かつ論理的に理解可能な仕方で説明するのに非常に効果的であると言える。

この三作品には、形式的特徴の共通性に加え、語られる対象の共通性も見られる。本論文第2部では、ミンネの教訓詩の内容的統一性が論じられる。ミンネの教訓詩におけるミンネ概念を整理すると、個々の作品間に生ずる成立年代の隔たりにもかかわらず、これらの作品はほぼ同じ理念を踏襲していることがわかる。それは「ご婦人 (vrouwe) 」に対する「奉仕 (dienst) 」の理念である。ミンネ概念の中核に位置するこの特徴は、中世盛期の様々な文学作品に描かれたミンネ観ともかなりの部分で共通するが、この点に関して、まず第2部第1章では「奉仕」概念を中心に考察される。ミンネの教訓詩に描かれているミンネは、個人的な交際の枠に留まるものではない。奉仕者は、彼が属する共同体の肯定的価値観としての「美德 (tugent) 」を体得・履行するための「労苦 (arbeit) 」に勤しむことによって共同体から「名誉 (êre) 」を授かる、すなわち「騎士 (ritter) 」という称号が与えられる。そして、この奉仕という理念自体が共同体秩序を維持していく機能を有しており、ミンネは一種の社会的規範のレヴェルにまで高められていると結論づけられる。

続く第2章では、奉仕の対象である「ご婦人」をミンネの教訓詩がどのように描いているかについての考察がなされる。ミンネの教訓詩において「ご婦人」は、「名誉の導き手」であり、この世の「喜び」をもたらす存在として絶対的地位が与えられている。ただし、奉仕における「ご婦人」の絶対化は無条件におこなわれるのではなく、「騎士」の場合同様、共同体の承認を必要としている。奉仕者は「騎士」としての徳目を備えて初めて共同体に肯定的に受け入れられる。同様に「ご婦人」という女性に対する形容もまた、単に社会的地位の高い女性を表すものではなく、「女性らしい (wîplich) 」諸価値観を満たした女性に対してある種の称号として付与されたものであると結論される。

第2章第2節では、女性の美と女性性が結び付けられて、ミンネの官能性を表す点に着目している。ミンネは共同体秩序において最高に価値あるものとされると同時に、ひとつ間違えば共同体秩序を崩壊させかねない力をも有している。それがミンネの官能性の悪しき一面、性的放埒であるが、しかし、中世の詩人たちはそのような〈危険な力〉をコントロールする術を受容者に説くことで、ミンネを (受容者の) 共同体の道徳的秩序保持の原理として肯定的な意味において理念化していると主張される。この点に関連するのが第3

章の、ミンネと結婚の関連性について考察である。「宮廷風恋愛」という形式が婚外恋愛、姦通を暗示しているように、ミンネと結婚が相容れるか否か、という問題が生じるが、ミンネの教訓詩、とりわけウルリヒの『婦人の書』では結婚がミンネの「場」として機能すること、ミンネが社会制度としての結婚と調和していることが説かれている。

第3章では第1章と第2章で言及した論述の骨格、換言すれば、ミンネの教訓詩の内容的構造をミンネの教訓詩の批判的描写と受容者との関連性（第1節・第2節）、および作品の教示的意義の観点から分析している（第3節）。ミンネの教訓詩は、ただ単にミンネの素晴らしさについてを語っているだけではない。ミンネの教訓詩では、批判的描写の占める割合が少なくない。ミンネの教訓詩における〈批判〉という叙述形式は、受容者の生きる世界とも密接に関連し、〈作者—作品—受容者〉という受容連関をより強く映し出している。文学における世相批判は、その作品が成立した時代についての共通認識が作者（作品）と受容者との間に築かれていなければ意味を持たない。このことから、作品の受容者の射程は宮廷に生きる人々であり、ミンネの教訓詩に描かれているミンネの理念、奉仕の理念は、宮廷社会（の人々）を前提としている。また、ミンネの教訓詩の〈批判書〉という特徴は、その内容が受容者にとっての差し迫った問題として提起されていることを意味している。ミンネの教訓詩は受容者の「期待の地平」を呼び起こし、その都度受容者とミンネの関係を変化、拡張、修正していると結論づけられる。

このような批判的描写は、受容者の誤った価値観を修正し、教養を高める、あるいは新たに肯定的な価値観を芽生えさせる効果がある。その上でミンネの教訓詩は、ミンネを「教示できるもの、習得できるもの」として概念化し、受容者に向けて「どう在るべきか」についての教を説いている。ミンネは、その官能性が示すように、肯定的な意味においても否定的な意味においても社会を変革する力を有するが故に、その力を正しく認識し、実践することを人々に示すための〈指南書〉が必要であったと説かれる。

最後に第4節では、個々の作品に描かれている理想郷の分析が行われる。理想郷はある種の虚構ではあるが、ミンネの教訓詩に描かれているのは手の届かない空想の世界ではなく、そこにかかかれている〈教え〉によって（受容者が）実現可能な世界観である。ミンネの教訓詩は、批判的な描写を伴いつつ、そして理想的な世界観を呈示することによって、共同体秩序における〈理想的なミンネ〉を構想している。ミンネの教訓詩では〈危険な力〉を〈理想的なもの〉へと導く方策が説かれており、そこにこそミンネの教訓詩の教訓詩たる意義が存在していると言われる。

結論として導き出されるのは以下である。ミンネの教訓詩は、現実世界のあらゆる場面において宮廷社会と恋人たちが共存できる、調和した、理想のミンネを論理的に呈示し、その実現を可能ならしめるための〈指南書〉の役目を負っている。ミンネを抒情的にでも、物語という形式でもなく、〈理論書〉かつ〈指南書〉という形式で著したところにミンネの教訓詩の特異性と独自性がある。「ミンネとは何か」という問いと答えの循環の中で、ミンネの教訓詩という文学ジャンルが生まれ、ミンネの教訓詩が社会批判や理想郷の描写を伴って〈教え〉として受容者に示されていることは、ミンネが中世の文学作品の内でのみ完結した限定的あるいは閉鎖的な現象であったわけではなく、むしろミンネは〈作者—作品—受容者〉の属する共同体秩序と密接に結びついていること、それ故に文学作品が世の中を動かす力を有していることを如実に示しているのである。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の通りである。

中世独語圏文学研究において、『ニーベルンゲンの歌』『トリスタン』などの叙事詩とミンネザングと名付けられる叙情詩に関する研究は盛んであるが、「ミンネ論」(Minnerede) 諸作品の研究は、日本のみならずドイツ語圏においても論じられることの少ない分野である。この作品群をとりあげ、特徴の共通性を分析して著作意図を考察し、ミンネに関する教訓詩としての文学ジャンル成立と関連させて解き明かした点は、高く評価される。いわゆる「ミンネの弁論」として既に知られている作品群の成立過程は今なお文学史上のブラックボックスであるとおぼしく、そこへ新たな光を当てようとする本論文は、従来のジャンル論に対して将来的に革新的な一石を投じるための端緒となりうるものである。

主としてとりあげられた作品、トマジン・フォン・ツィルクレーレ『異邦人』、デア・シュトリッカー『婦人の名誉』、ウルリヒ・フォン・リヒテンシュタイン『婦人の書』の緻密な読解と、特に最後の作品の詳細な解釈は、中世高地独語に関する確実な知識と広範な研究書の比較検討に裏付けられている。

けれども、本論文に問題点がないわけではない。

ミンネの「理論書」と「指南書」の区分が十全に明確化されているとは言えず、主観的区分判断を排するためにも、形式的な範疇に関して、より緻密な考察がされるべきである。同じく、ある作品の想定受容者(男性向けか女性向けか、宮廷人か庶民か等)に関しても、社会的時代的背景に関する資料による補強がなされる必要がある。

また、Ulrich von Liechtenstein の作品解釈における女性観の斬新性は注目すべきであるが、Hartmann から Der Stricker、そして Ulrich von Liechtenstein へと時代が進むにしたがって、「教訓詩」がその到達点へと近付いていくとの主張に、さらなる説得力をもたせる論証が期待される。これは援用しているヤウスの受容論を活かしきれていないためと考えられる。また、社会背景に関する記述を抑えすぎて不明瞭になっている箇所(たとえば「奉仕階級」(Dienstleute, Ministeriale) は実際に社会的現実として存在したが、それを婦人への Dienst と直結させているようにみえる)があるなどの諸点に問題があるが、これらは、本論文の本質的な意義を致命的に損なうものではないと思われる。

本論文は、中高ドイツ語文献におけるミンネ関係文献問題の分析として、高い学問的価値をもつ労作である。日本ではまだあまり知られていない作品を、わかりやすい翻訳とともに文学史の中に位置づける研究として、日本における中世文学受容・研究に大きな寄与をなしうるものである。

### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

平成24年3月14日

論文審査担当者

古澤 ゆう子

清水 朗

武村 知子

平成24年2月20日、学位請求論文提出者 田中 一嘉 氏の論文「中世ドイツ文学盛期における『ミンネの教訓詩』 - ミンネ概念の形成とその指南 - 」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、田中一嘉氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、田中 一嘉 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。